

韓国内の倭寇研究の学術史的検討

金普漢*

- I. 研究の目的および背景
- II. 韓国における倭寇研究の成果と動向
 - 1. 1950～1980年代の研究動向
 - 2. 1990年代の研究動向
 - 3. 2000年代の研究動向
- III. 研究成果の主題別分析
 - 1. 倭寇根拠地の問題
 - 2. 倭寇発生と猖獗、そして消滅の原因
 - 3. 倭寇主体の問題
- IV. 倭寇研究の問題と展望

I. 研究の目的および背景

昨今、世界のニュースでは国際海洋秩序を逸脱した海賊行為記事をたびたび目にすることがある。いわゆる略奪・人身拉致・釈放交渉など、過去の歴史に存在したような一連の事件がそれである。同様に、かつての東アジア海域において、海賊行為が盛行していたという事実を確認することはそう難しいことではない。なぜなら『高麗史』・『高麗史節要』・『朝鮮王朝実録』・『明史』などでは、倭人の略奪行為を「倭寇」と称し、比較的詳細に記録しているためである。

東アジア海域は本来、韓・中・日の文化交流と物資流通において非常に重要な連結通路であった。また、諸国家が黄海・東海・東シナ海などで時期別に国家間の疎通と断絶、衝突と葛藤を周期的に繰り返してきた交通路であった。つまり13世紀以後、倭寇が出現した時、高麗人・朝鮮人にとっては倭人に対する警戒の空間となり、モンゴル膨張による国際秩序再編では、衝突の空間として機能した。いわば、交流と疎通の順機能と警戒と衝突の逆機能が満ち潮と引き潮のように交差する海域であった。

14世紀は政治社会的に東アジア世界が激変する時期である。特に14世紀半ば以降のわずか半世紀だけで、高麗に倭寇が約500回(学者によって差異はあるが)出現している。このような理由で、麗末鮮初の韓日関係史における核心研究テーマとして、倭寇が注目されている。東アジア世界が混乱を克服して安全を取り戻していく時期であったが、倭寇は絶えず出没していたことを考えれば、こうした注目はなおさらであろう。

* 檀国大学校教養学部助教授

最近まで韓国と日本では、倭寇に関する多くの研究が蓄積されてきた。しかし、韓・日倭寇研究者の間では、倭寇の発生原因と主体をめぐり、見解が鋭く対立している。例えば、一部の日本の研究者は、倭寇の発生原因が高麗の政治状況からはじまったとみて、倭寇の主体を高麗人・朝鮮人であると主張している。一方韓国では、倭寇発生の原因が日本の政治状況と密接に関係を持っていたとし、日本の政治状況から論じられるべきだとの主張がある。これはつまり、倭寇の主体が日本人であるため、日本史から倭寇発生の原因と倭寇消滅の原因が究明されなければならないという論理である。

ゆえに、倭寇の発生原因と主体に関する研究史は、あらためて整理される必要がある。すでに2002年『韓日関係史研究の回顧と展望』において、倭寇研究の学術的成果が整理されているが¹、それ以降も多くの研究が発表されている。ここでは倭寇研究史の再整理を通じて、両国学者の見解の違いがどこから発生しているのか、また違いの原因は何であるのか、学術的に再検討する必要がある。言い換えれば、韓国の倭寇研究史を整理・紹介することにより、日本中心の学問的独善を牽制し、東アジアの諸国が共有することができる学術的研究の方向を示そうとするものであり、これが本研究の目的かつ背景である。また、東アジア共同体が議論される昨今において、相互共存と友好増進の指標の再設定が求められる状況を受けたものでもある。

Ⅱ．韓国における倭寇研究の成果と動向

1. 1950～1980年代の研究動向

現在まで14～5世紀の韓・日間の争点となっている倭寇史と関連して、韓国内の研究成果を整理してみたい。

韓国において、高麗と朝鮮に出現する倭寇に関する学術的研究は、1950年代から始まった。時期別に研究論文をみても、1950年代に3本²、1960年代に1本³、1970年代4本⁴、1980年代に6本⁵が発

¹ 韓文鍾、2002「朝鮮前期の韓日関係史研究の回顧と展望」『韓日関係史の回顧と展望』(国学資料院、ソウル)

² 申基碩、1957「高麗末期の対日関係—麗末倭寇に関する研究」『社会科学』1(韓国社会科学研究会)

李鉉淙、1959「朝鮮初期倭人接待考(上・中・下)」『史学研究』3・4・5(韓国史学会)

申奭鎬、1959「麗末鮮初の倭寇とその対策」『国史上の諸問題』3(国史編纂委員会、ソウル)

³ 宋正炫、1966「莞島と倭寇—李朝時代を中心に」『湖南文化研究』4(全南大湖南文化研究所)

⁴ 李銀圭、1974「15世紀初韓日交渉史研究—対馬島征伐を中心に」『湖西史学』3(湖西史学会)

孫弘烈、1975「高麗末期の倭寇」『史学誌』9(檀国史学会)

孫弘烈、1977「麗末・鮮初の対馬島征伐」『湖西史学』6

李鉉淙、1977「高麗と日本との関係」『東洋学』7『附録:第6回東洋学学術会議録(1976)』(檀国大東洋学研究所)

⁵ 韓容根、1980「高麗末倭寇に関する小考」『慶熙史学』6・7・8(慶熙大史学会)

羅鐘宇、1980「高麗末期の麗・日関係—倭寇を中心に」『全北史学』4(全北史学会)

李鉉淙、1981「高麗・朝鮮時代韓日関係の展開」『日本学』1『附録2:第2回日本学学術会議発表要旨』(東国大日本学研究所)

張学根、1983「朝鮮の対馬島征伐とその支配対策—対外関係を中心に」『論文集』8(海軍士官学校)

李鉉淙、1984「朝鮮前期の日本関係」『東洋学』4『附録:第13回東洋学学術会議録(1983)』(檀国大東洋学研究所)

車勇杰、1984「高麗末倭寇防衛策としての鎮戍の築城」『史学研究』38(韓国史学会)

表されている。このほかに著書として1970年代の『韓国史』と1980年代の『新編高麗時代史』において、通史的に高麗時代を執筆する過程で倭寇研究が総整理されている⁶。

1950年代から1980年代にかけての倭寇研究は、主に『高麗史』・『高麗史節要』・『朝鮮王朝実録』などの国内史料を利用した研究が中心であったと指摘できる。その理由として、韓国国内で日本側史料に接する機会が与えられなかったことが挙げられる。日本側史料への接近は、1990年代半ばから日本に留学していた研究者が帰国し、自由な往来が大きく作用したと考えられる。

1950年代の研究において、はじめて申基碩は『高麗史』・『高麗史節要』・『東国通鑑』・『東史綱目』などの史料を引用して、倭寇が出現する高麗時代全時期の倭寇活動を集中的に研究した。特に、高麗時代の倭寇が出現する理由と倭寇の根拠地を列挙しながら、高麗政府の倭寇対策として軍事的な防御策や、禁寇の外交使節まで扱っており、草創期の倭寇論文としては幅広く倭寇問題を扱ったものとして評価することができる(申基碩、1957)。

同様に申奭鎬は、高麗末倭寇の勃興を列挙しながら、その原因を日本の内乱と高麗国防力の弱化と把握した。麗末鮮初の水軍整備と火砲の製造などを含め、朝鮮初期の対倭政策における対馬島を中心とする懐柔策(朝貢貿易)と強硬策(対馬島征伐)を列挙し、倭寇問題を考察した(申奭鎬、1959)。李鉉淙は高麗末倭寇の侵入回数と侵入地域に関する図表を作成し、朝鮮初期倭寇の活動について、朝鮮の宥和策とその反作用として朝鮮の弊害と対策を三浦倭乱(1510)以前まで体系的に論じた(李鉉淙、1959)。

1960年代の倭寇研究は、宋正炫の論文1本のみである。これは、朝鮮時代を通時代的に列挙し、現地調査を通じて莞島地域に出現した倭寇の活動と防備策を中心に倭寇研究を試みたものである(宋正炫、1966)。

倭寇に関する体系的な研究が本格化するのには、1970年代以降であるとしても差し支えないであろう。既存の倭寇研究の成果は、国史編纂委員会で発行した『韓国史』8・9で李鉉淙によって整理された。彼の研究は、倭寇の発生原因を高麗と日本の国内的原因にそれぞれ区別し、把握しようと試みた。彼は高麗の国内的要因として、恭愍王の反元政策の推進と改革政策の失敗、親元・親明派の葛藤と対立による政治的混乱とモンゴルの侵入による田土の荒廃化、そしてこれによる国力と国防力の弱化を挙げている。一方日本国内の要因としては、南北朝内乱期の混乱した社会的不安と山賊・海賊の登場などを指摘し、高麗からの対日交易が断絶されたことにより交易に従事していた倭人までもが倭寇に変身したことを挙げている。彼は倭寇が「強盜的武力集団」あるいは「交易倭人」であったと規定し、倭寇の目的が、地方豪族の経済的利益の追求と、辺民の穀物と生活必需品確保にあったと分析した。加えて禁寇対策で被虜人の送還問題に初めて触れ、図表を作成している。また、倭寇の被害を政治・社会・経済・文化の分野に分けて詳細に整理・分析し、さらにこれを進めて朝鮮初期の倭人対策をも包括するなど、多様な内容を盛り込んでいる(李鉉淙、1973:1974)。

孫弘烈の研究は、韓国における倭寇研究がさらに一歩進んだことを示すものである。彼は、倭寇発

⁶ 李鉉淙、1973「倭人関係」『韓国史』9(朝鮮:両班官僚国家の成立)(国史編纂委員会、ソウル)
李鉉淙、1974「倭寇」『韓国史』8(高麗:高麗後期の社会と文化)(国史編纂委員会、ソウル)
金庠基、1985「倭寇の禍」『新編高麗時代史』(ソウル大学校出版部、ソウル)

生を日本国内の事情と高麗国内の事情に区分して言及し、以前の研究と同じく倭寇の根拠地として対馬島・壱岐島・松浦地方を指摘した。また、倭寇活動をモンゴルの日本遠征以前(高宗・元宗時期)、初期の倭寇(1350年以前)、猖獗期の倭寇(1350年以後)に区分して叙述した。また倭寇の掃蕩と関連して、倭寇3大捷(鴻山・荒山・南海大捷)に言及し、高麗の倭寇防御対策を陸上防御と水軍の対馬島征伐、そして外交使節の派遣に分けて述べた(孫弘烈、1975)。

1980年代、羅鐘宇は倭寇侵入回数を新たな図表によって整理し、倭寇出現時期と内容を細密に分析して倭寇研究をさらに体系化した。彼は、高麗倭寇の侵入を猖獗期以前(1350年以前)と以後(1350～92)に区分し、また猖獗期以後を3つの時期(初期:1350～73、中期:1374～83、後期:1384～92)に細分化した。高麗の倭寇対策としては、軍事体制の強化、討伐、懐柔策、使節の派遣とに区分して言及した。結論では、麗・日関係が倭寇によって政治・経済的に非正常的対外関係に転換され、高麗王朝が解決できなかった禁寇問題は、朝鮮王朝の公貿易の展開により、倭寇が終息したと主張した(羅鐘宇、1980)。

しかし、1980年代までの倭寇研究は、倭寇発生の原因において、日本国内の政治変化についての具体的な研究分析がなく、むしろ高麗国内の状況変化を中心に倭寇の侵寇目的、倭寇の性格究明、倭寇侵入の時期区分、倭寇侵入に対する防備策を扱っていたといえる。これは、日本中世史の研究が韓国内に皆無であった当時の状況を考慮すると、当然の結果ではなかったかと考えられる。

2. 1990年代の倭寇動向

1990年代に入り、倭寇研究は新しい視点からのアプローチが試みられた。前年代に比べ量的にも多くの研究が発表され、発表論文は15本を数えた⁷。『新編韓国史』は対外関係史の側面から総合的に倭寇を扱い⁸、倭寇専門研究書としての単行本も出版された⁹。

⁷ 崔韶子、1992「元末倭寇と元・日関係」『梨花大史苑』26(梨花女子大学校史学会)
丁仲煥、1992「倭寇に対する一考察—高麗および高麗後期の倭寇を中心に」『港都釜山』9(釜山市史編纂委員会)
李慶喜、1993「高麗末倭寇の侵入と対倭政策の一断面」『釜山女大史学』10・11(釜山女大史学)
羅鐘宇、1994「朝鮮前期韓・日関係の性格研究」『東洋学』24(檀国大東洋学研究所)
盧啓鉉、1995「朴葦・金士衡の対馬島征伐」『師大論文集』30(釜山大学校師範大学)
南基鶴、1996「蒙古侵入と中世日本の対外関係」『アジア文化』12(翰林大アジア文化研究所)
張得振、1996「高麗末倭寇侵掠期‘民’の動向」『国史館論叢』71(国史編纂委員会)
韓文鍾、1997「朝鮮初期の倭寇対策と対馬島征伐」『全北史学』19・20(全北史学会)
朴漢男、1997「恭愍王代の倭寇侵入と禹玄宝の‘上恭愍王疏’」『国史』34(国防軍事研究所)
金琪燮、1997「14世紀倭寇の動向と高麗の対応」『韓国民族文化』9(釜山大民族文化研究所)
李 領、1996「高麗末期倭寇構成員に関する考察—‘高麗・日本人連合’論または‘高麗・朝鮮人主体’論の批判的検討—」『韓日関係史研究』5(韓日関係史研究会)
李 領、1997「‘倭寇の空白期’に関する一考察」『日本歴史研究』5(日本史学会)
李 領、1999「日本人がみる倭寇の正体—‘庚寅以後倭寇’と日本国内情勢を中心に」『歴史批評』46(歴史問題研究所)
尹誠翊、1999「元代倭寇についての考察」『東洋学研究』15(東洋学研究会)
金普漢、1999「一揆と倭寇—‘下松浦一揆’の成立と関連して」『日本歴史研究』10(日本史学会)
⁸ 羅鐘宇、1994「紅巾賊と倭寇」『韓国史』20(国史編纂委員会、ソウル)
河宇鳳、1995「日本との関係」『韓国史』22(国史編纂委員会、ソウル)
羅鐘宇、1996『韓国中世対日交渉史研究』(圓光大学校出版局、全州)

1990年代半ば以降、日本に留学していた研究者の帰国によって新しい傾向の研究が追加され、倭寇研究が3つの方向で進展した。第一に、既存の韓国史的観点の研究と同一線上の流れ、第二に、韓日関係史という研究視点からの倭寇史の整理、第三に、日本史的視点からの倭寇の実態解明が紹介されて倭寇研究が活気づいたこと、である。このように日本史中心の研究視角の登場が、1990年代における研究の新傾向であった。

まず崔韶子は、元末における日本国内の混乱を利用して、高麗だけでなく元代に中国沿岸で倭寇の活動が現れていることを立証する研究を試みた(崔韶子、1992)。これとは反対に、尹誠翊は元代の倭寇を単なる日本海賊として規定するのではなく、明代の倭寇と同様に東アジア海上交流において現れた交流の一形態であると把握した(尹誠翊、1999)。

一方張得振は、韓国史の観点から、高麗末倭寇の侵略期における「民」の動向について研究を試みた。彼は倭寇の侵略に伴う軍制の変化が及ぼす民の負担加重と民心の離反、倭寇と附倭層の台頭と発生を高麗政府に対する反抗と結論づけた。倭寇で捕虜となった後に倭寇の手先となった者も存在したので、高麗の全ての民が大同団結して倭賊の侵入に抵抗したという通念は再考されなければならないと指摘した(張得振、1996)。既存の研究と異なる新しい研究視角だが、倭寇を高麗人の離反であるとする日本の研究者の主張を擁護する理論として捉えられるのではないかと危惧される見解であった。

このほかにも、朴漢男は、恭愍王に対する禹玄宝の上奏文によって水軍の再建が試みられ、その結果として倭寇の撃退(鎮浦大捷と南海大捷)がなされたと主張した(朴漢男、1997)。また盧啓鉉は、高麗と朝鮮の倭寇根絶掃蕩策として朴葳と金士衡の対馬島征伐について触れた(盧啓鉉、1995)。

韓日関係史の視角から、韓文鍾は高麗末と朝鮮初の倭寇発生要因と侵寇目的、高麗の倭寇対策に区分して分かりやすく整理し、朝鮮初期の倭寇侵入件数と通交件数を図表によって対比して、倭寇が平和な通交者に変質していく過程を体系的に整理して発表した(韓文鍾、1997)。

日本史の視角から、李領は倭寇集団の性格について、日本の田中健夫の見解(倭寇＝高麗・朝鮮人連合・主体説)を痛烈に批判した。彼は、田中が根拠として提示した李順蒙の上書の内容を綿密に分析し、それが高麗末の流民についての対策を強調したに過ぎない上書であったと批判した。また庚寅年(1350)以降の倭寇の猖獗は、南朝の征西将軍府が九州と瀬戸内海地域の悪党を南朝側の軍事力として動員する過程で発生したと主張し、その大規模な侵寇の目的は、少弐頼尚が軍糧米を確保するためであったと説明した(李領、1996;1999)。また彼は「13世紀倭寇」と「庚寅年(1350)から1392年までの倭寇」を比較し、麗蒙連合軍の侵攻以後に14世紀中葉までの倭寇がごく少数のみでしか発生していない理由が、高麗との軍事的緊張感と北条氏得宗専制政権の海上警固策施行にあり、根本的には対馬島を排他的に支配していた少弐氏と宗氏が倭寇の発生、禁庄、跋扈に大きな影響を及ぼしていたと主張した。同時に倭寇史において対馬島が占める比重は絶対的であったと結論づけた(李領、1997)。

倭寇の実態を解明するための研究は、南基鶴によっても試みられた。彼は1323年と1350年以後の

羅鐘宇ほか、1998『韓国と日本 歪曲とコンプレックスの歴史』1(白樺、ソウル)

⁹ 国防軍事研究所編、1993『倭寇討伐史』(国防軍事研究所、ソウル)

倭寇についてモンゴル侵入以後に高麗との外交関係が疎遠になりながら、これを主管した大宰府武藤氏の勢力弱化によって倭寇の統制が弛緩され、鎌倉幕府末期に悪党と海賊の横行、後醍醐天皇の親政以来の政治的動揺と国内の社会政治的矛盾の深化が作用して高麗に倭寇が出現したのではないかと分析した(南基鶴、1996)。李領と南基鶴の研究は、これまで見られなかった日本史的立場から倭寇問題を扱っており、韓国における倭寇研究に新しい研究視角を紹介したものとして評価できる。

このような研究方法は、金普漢に受け継がれる。彼は、南北朝内乱期における九州松浦地域の武士の政治的動向に注目し、足利直冬が九州に下っていくと武士たちが混乱に陥り、このことが高麗の「庚寅年倭寇」と密接に関連していると結論付けた。そして観応擾乱の混乱期に一族の分裂を経験した松浦一族は、混乱期の難題を克服するため、組織の成立を渴望するようになり、これが自律性に即した未来志向的な組織としての「下松浦一揆契約状」であると把握した。特に、一揆は自治の規定を定めるにあたって夜討・海賊の禁止条項を挿入し、これが隣国である高麗への倭寇の出没を自制させるのに、大きな影響を与えたと主張した。要するに倭寇の消滅とは、倭寇の根拠地や活動の舞台であった日本国内の事情、言い換えれば在地の安定と該当地域住人の自治能力の向上と密接に関連していたと分析した(金普漢、1999)。

このほかに、羅鐘宇は、国史編纂委員会『韓国史』20で、自身の研究成果を中心に高麗時代の倭寇史を整理し(羅鐘宇、1994)、朝鮮前期までの韓・日関係と対倭寇政策を整理した研究書を出版した(羅鐘宇、1996)。また、張得振と共に、現在までの倭寇研究成果を分かりやすく一般読者に紹介している。倭寇活動の本来の目的と構成員の主体、対馬島征伐の正当性と日本海賊集団の実態をよく紹介して整理している(羅鐘宇ほか、1998)。

以上、1990年代の研究では、日本の研究を批判しつつ、倭寇の発生背景を日本国内の情勢と関連づけて分析しようとする新傾向が支配的であったことがわかる。こうした新たな研究は、日本の研究成果を正確に分析し、これに匹敵しうる対応理論を設定することができる研究段階に差し掛かっていることを示唆している。

3. 2000年代の研究動向

1990年代の研究の主流が、日本の研究に対する否定・批判であったと言えるのであれば、2000年代は、韓国における倭寇研究の新たな枠組を設定する時期と見ることができる。前年代と比較しても、かなりの研究業績が蓄積されており、2007年まですでに16本以上が発表され¹⁰、倭寇専門研究書も単

¹⁰ 韓文鍾、2000「朝鮮前期対馬早田氏の対朝鮮通交」『韓日関係史研究』12(韓日関係史学会)
 韓文鍾、2005「朝鮮前期倭人統制策と通交違反者の処理」『倭寇・偽使問題と韓日関係』韓日関係史研究論集4(景仁文化社、ソウル)
 李在範、2003「高麗後期倭寇の性格について」『史林(成大史林)』19(首善史学会)
 鄭恩雨、2005「高麗後期普明寺金銅菩薩坐像と倭寇との関係」『美術史学』19(韓国美術史教育学会)
 李領、2000「『庚寅年倭寇』と日本の情勢」『国史館論叢』22(国史編纂委員会)
 李領、2004「高麗末の倭寇と馬山」『韓国中世史研究』17(韓国中世史学会)
 李領、2005「倭寇の主体」『倭寇・偽使問題と韓日関係』韓日関係史研究論集4(景仁文化社、ソウル)
 李領、2006「『庚寅年以後の倭寇』と松浦党一禰王3年(1377)の倭寇を中心に」『日本歴史研究』24(日本史学会)

行本として出版されている¹¹。また学術史的にも、韓国史からみた倭寇という枠組を越え、韓日関係史から見た倭寇や、日本史からみた海賊・倭寇に接近する試みが目立っている。

まず、韓国史の研究視点から、李在範は高麗後期倭寇の存在形態について言及し、「モンゴルの日本遠征以前の倭寇」、「モンゴルの日本遠征以後の倭寇」、「庚寅年以後の倭寇」に区分し、倭寇消滅過程までの展開を再整理した(李在範、2003)。鄭恩雨は、佐賀県立博物館の普明寺金銅菩薩座像をはじめ、14世紀の倭寇が高麗から略奪していった日本にある30余体の略奪品を紹介し、倭寇が文化財略奪も並行したことを想起させる論文を発表した(鄭恩雨、2005)。

韓日関係史の視角からは、朝鮮初期倭寇の消滅に関する韓文鍾の研究がある。彼は、高麗末と朝鮮初倭寇の頭目で受職倭人でもあった対馬早田氏の分析を通じ、彼らが倭寇から始まり、通交者、受職倭人、三浦恒居倭人へと変身しつつ、朝鮮との通交関係を維持していく過程を考察した。同研究は、倭寇が朝鮮との通交者へと転換、定着した後、どのように朝鮮との通交を維持していくのかを事例を挙げて考察している点に特徴がある(韓文鍾、2000)。また、彼は朝鮮初期倭寇対策と外交的な交渉の結果、倭寇は次第に減少し、使送倭人・興利倭人・投化倭人などの平和的な通交者に転換していったと分析した。一方1409年以降、倭寇の侵入は急激に減少していき、日本各地から渡航する倭人が次第に増加していったため、対馬島を通じた間接統制方式と文引制度が渡航違反者を防止するのに限界があったと分析した(韓文鍾、2005)。これは、朝鮮時代になって倭寇禁止のために登場する宥和策を中心にその限界と効用性を分析したものである。結局朝鮮は、高麗の略奪物に劣らない財政的負担を引き受ける形で倭寇問題を解決したと評価できるのである。

李領は馬山地域に出没する倭寇の侵攻回数や集団の数を分析し、馬山が倭寇の本拠地であると同時に集結地であり、さらには通過地としても機能したと結論づけた。馬山は倭寇の立場から見れば、軍事拠点であったので、脅威に他ならなかったとしている(李領、2004)。

また、彼は4世紀間持続されてきた倭寇を「13世紀の倭寇」、「庚寅年以降の倭寇」、「朝鮮時代の倭寇」に区分し、最も深刻であった庚寅年の倭寇の正体は、日本の研究者の主張する南北朝内乱期の混乱に乗じた日本西部地域の民衆の略奪ではなく、むしろ少弐氏麾下の九州の南朝勢力であったと再度主張した(李領、2003)。庚寅年倭寇の実態については、対馬島と壱岐島などの九州西部に恒居する乱臣が兵糧の確保のために高麗に侵入したものとみた。松浦地域の人々が南朝の軍勢と共に高麗に侵攻していったとみる見解も提起した(李領:2006)。

南基鶴、2003「中世高麗・日本関係の争点—モンゴルの日本侵略と倭寇」『日本歴史研究』17(日本史学会)

金普漢、2001「海洋文化と倭寇の消滅—五島列島共同漁業と関連して」『文化史学』16(韓国文化史学会)

金普漢、2001「少弐冬資と倭寇の一考察—少弐冬資の被殺と関連して」『日本歴史研究』13(日本史学会)

金普漢、2004「東アジアの経済圏域における略奪の主役、海賊と倭寇—10～13世紀日本の海賊と倭寇を中心に」『中国史研究』29(中国史学会)

金普漢、2005「中世麗・日関係と倭寇の発生原因」『倭寇・偽使問題と韓日関係』韓日関係史研究論集4(景仁文化社、ソウル)

金普漢、2006「東アジア海域のアウトロー」『日本歴史研究』24(日本史学会)

具山祐、2007「日本遠征、倭寇侵略と慶尚道地域の動向」『韓国中世史研究』22(韓国中世史学会)

¹¹ 韓日関係史研究論集編纂委員会、2005『倭寇・偽使問題と韓日関係』韓日関係史研究論集4(景仁文化社、ソウル)

李 領、2007『忘れられた戦争倭寇—その歴史現場をたずねて—』(韓国放送通信大学校出版部、ソウル)

この問題と関連し、南基鶴は多少異なる見解を展開した。彼は、倭寇の民族構成と倭寇集団の性格について、高麗末の倭寇は、南北朝動乱という日本国内の混乱に乗じた九州・四国などの西国地方の「頑民」・「賊徒」であり、つまりは「悪党」・「海賊」の略奪行為であったとした。また倭寇の目的が兵糧米の調達や一時的な避難場所の確保という軍事作戦の一環とみる見解に疑問を投げかけている(南基鶴、2003)。このように倭寇の主体については、これを日本史内に求める論議が、本格的に展開しはじめたといえる。

またこれについては金普漢の研究も注目に値する。彼は1370年代における倭寇の急増は、九州探題今川了俊が、九州において独自の権力を形成する過程において発生した、いわゆる副作用の産物であると分析した。また、この過程で少式冬資が殺害されるが、このような了俊の突出した行動は当時の在地勢力に対してかなりの動揺を与え、在地の離脱者＝「反探題勢力」を量産させるに至ったとみた。これが『高麗史』に記録された「逋逃輩」という倭寇集団であり、1370年代半ばの倭寇の主体勢力であったとする。結局、倭寇は九州の在地勢力の中で「反探題勢力」の性質をもつ集団の活動であったので、高麗の要請通りに禁寇の問題が容易に解決できなかったと主張した(金普漢、2001〈少式冬資と倭寇の一考察〉)。

また、彼は13世紀の「海上武士団」の活動に注目し、承久の乱とモンゴルの侵入で日本国内の統制が緩んでいった状況から、海上武士団が「略奪の新しい場」を開く機会を得たと分析した。さらに、東アジアの国際情勢が混迷した状況から、交易と略奪の二重性が日本史における倭寇の登場に作用したと主張した。結局、日本列島内における海上活動の主人公である倭寇(＝海上武士団)は、中世東アジア海域における交易の主導権を掌握し、略奪と交易の二重的土台を創出するうえでの一助になったと考えた(金普漢、2004)。同時に、倭寇＝「東アジア海域のアウトロー」と初めて命名し、14世紀末の倭寇は日本九州の状況に敏感に反応する「反探題勢力」・「在地離脱勢力」と「海上武士団」の略奪行為であったとみた。これらがまさに略奪と殺生を恣行して、14世紀の東アジア世界を恐怖の中に追い込んだ「東アジア海域のアウトロー」であったと主張した(金普漢、2006)。

また彼は、倭寇の消滅と関連し、倭寇の根拠地であった松浦地域で高麗に対する海賊活動を展開した倭寇の定着により「浦内」で漁業権の紛争が加速化したことを指摘している。これを克服するために、1392年以降、各浦口で「押書状」が現れるが、これは海を分割して浦口で共同操業を公式化する目的で作られたものであったとした。漁場の分割は一年交替または一日交替であったが、相互の対立を緩和させながら、漁場を効率的に共同利用する方法であったと分析した。このような選択理由は、高麗で活動した多数の倭寇勢力が「浦内」に定着しながら漁労作業における均等な操業分配が切実であったためであると主張した(金普漢、2001〈海洋文化と倭寇の消滅〉)。

2000年代の研究における最大の成果は、倭寇の主体と活動問題について、日本史の視点から最も多く登場した点にある。従って倭寇の根拠地と倭寇の発生原因、そして消滅原因、倭寇主体の研究成果を主題別に再整理する作業も意味あるものと思われる。これを次章で整理してみることにする。

Ⅲ. 研究成果の主題別分析

本章では、既存の倭寇研究史から、倭寇の根拠地・倭寇の発生と猖獗の原因・消滅の原因・倭寇の主体などを主題別に扱ってみることにする。

現在まで韓国の研究で利用されてきた史料は、韓国側の史料として『高麗史』・『高麗史節要』・『東国通鑑』・『東史綱目』・『朝鮮王朝実録』・『老松堂日本行録』・『海東諸国紀』があり、日本側の史料として『明月記』・『吾妻鏡』・『青方文書』・『百鍊抄』・『鎌倉遺文』・『南北朝遺文』・『善隣国宝記』・『太平記』・『花宮三代記』・『歴代鎮西志』・『禰寝文書』・『中世法制史料集』など多数である。韓国で多くの研究者たちが韓・日の史料を幅広く利用して多様な研究を試みてきたことがわかる。

1. 倭寇根拠地の問題

日本史料によれば、九州の松浦地方は本来鎌倉初期から倭寇の根拠地として知られた地域である。実際に『明月記』・『吾妻鏡』・『青方文書』などの13世紀の史料では、松浦党が早くから高麗で倭寇として活動していたという明らかな証拠を提示しており、これに関する研究が進んでいる。

14世紀以降の倭寇の根拠地については、韓国の史料において多様な地域が紹介されている。『高麗史』・『高麗史節要』・『海東諸国紀』などに、対馬島・壱岐島・五島・平戸島・松浦地方、北九州・四国・瀬戸内海沿岸・内外大島など多様な地域を列挙している。

これまでの韓国の研究成果においては、研究者ごとに多少の見解の相違はあるものの大体において上記の地域が倭寇の根拠地として一貫して主張されていることが確認できる。

2. 倭寇の発生と猖獗、そして消滅の原因

現在、高麗末の倭寇の発生原因をめぐる韓・日学者間の見解が鋭く対立している。まず日本の研究者の一部は、倭寇の発生原因と倭寇の猖獗を高麗の状況からのみで解釈している。例えば、倭寇発生の原因として武装商人団、高麗の貿易制限、麗蒙連合軍の侵入に対する復讐などである。また、倭寇猖獗の原因についても、高麗土地制度の紊乱とこれに伴う高麗軍制の弛緩に求めている¹²。すなわち、高麗後期朝廷の失政と政治状況の悪化が倭寇の猖獗原因であったと規定し、倭寇の発生と猖獗、そして消滅の全過程が高麗内の政治状況と関連していたと結論づける傾向である。

一方で、韓国の研究者は、倭寇の発生原因が日本内の政治状況に起因すると一貫して主張している。特に日本史の視点から、倭寇の発生原因が南北朝の内乱期における悪党勢力の活動と兵糧米の確保にあったとする見解(李領、2000)、九州松浦地域の小武士たちによる恣意的な海賊活動とみる主張(金普漢、1999)などがそれである。そして1370年代の倭寇猖獗の原因が、今川了俊の独自の権力強化過程から離脱した「反探題勢力」の集団行動と把握しようとした(金普漢、2001〈少弐冬資と倭寇の一考察〉)。これらは、倭寇の発生原因が、急変する九州の政治状況と密接に関連していたとする共

¹² 田村洋幸、1967『中世日朝貿易の研究』(三和書房); 田中健夫、1982『倭寇一海の歴史一』(教育社歴史新書)

通の見解から出発している。

また、倭寇の消滅原因については、1990年代以前の韓国の研究では、高麗の軍事・外交的成果と朝鮮初の公貿易の展開からその原因を求める見解が主流であった。これに対し、松浦地域の在地勢力の一揆結成とその流動性により、高麗への倭寇出没が自発的に規制されたという見解が登場している(金普漢、1999)。さらに倭寇の定着に伴い、浦口内の高密度化を共同漁業権の分化によって克服していったとして、倭寇の消滅原因を日本史の立場から解釈することに力を注いだ(金普漢、2001〈海洋文化と倭寇の消滅〉)。

今後、倭寇消滅の原因を補うためには、高麗ではなく日本列島を集中的に研究する接近方法が必要である。すなわち、高麗の軍事的な対応によって完全に掃蕩されていないければ、彼らが追求する略奪物の代わりとなる補償財貨が日本から安定的に確保されなければならないからである。または、その代替物として彼らの根拠地における安定した生業の保証・定着が先行していなければならないのである。このようにして研究が補完されたとき、日本列島における倭寇の主体と、1380年代と1390年代の倭寇消滅が、整合性をもって説明することが可能になると考えている。

3. 倭寇の主体

14世紀半ば以降は、東アジアの海上における海賊の活動、すなわち倭寇活動が盛んになる時期である。日本の倭寇研究では、倭寇の主体を倭寇＝高麗・朝鮮人主体と捉え、高麗の禾尺・才人＝倭寇、あるいは済州島人＝倭寇とみる見解がある¹³。さらに進んで倭寇の大將であった阿只拔都が済州島出身であるかもしれないという主張まで提起されている。そして、以前の研究では言及されていなかった内容、つまり済州島民が倭寇として活躍したという論理が新たに登場する¹⁴。これは、倭寇の発生が高麗の内部事情に起因したように結論づけたものであり、自然に「倭寇主体論」に関心を向けようとする意図であると解釈することができる。また、倭寇の根拠地と発生原因が日本内の混乱した政治状況の結果という事実を迂回的に回避し、倭寇の根拠地を隠そうとする意図として把握される。

これに反し、上記の研究を強く批判しながら、庚寅年倭寇の主体を日本内の悪党勢力とする主張(李領、1996)や、九州・四国などの西国地方の「頑民」・「賊徒」と「悪党」・「海賊」とする意見(南基鶴、2003)、そして「反探題勢力」・「在地離脱勢力」と「海上武士団」の略奪行為とみる主張が並存している(金普漢、2006)。このように、韓国側でも日本史の視覚から倭寇の主体を日本人と考える見解が大多数を占めている。

¹³ 田中健夫、1987「倭寇と東アジア通航圏」『日本の社会史』(岩波書店); 田村洋幸、1967『中世日朝貿易の研究』(三和書房)

¹⁴ 田中健夫、1987「倭寇と東アジア通航圏」『日本の社会史』(岩波書店); 高橋公明、1987「中世東アジア海域における海民と交流—済州島を中心として—」『史学』33(名古屋大学文学部研究論集)

IV. 倭寇研究の問題と展望

一部の日本の研究史においては、倭寇の根拠地、倭寇の発生・猖獗の原因、そして倭寇の主体が倭寇被害地域である高麗にあると主張されてきた。しかしこれらの視点には、日本国内の政治変化と在地勢力の流動性という必須的要素が無視されている点が認められた。一方、韓国の研究成果を総合すると、倭寇の根拠地、倭寇の発生・猖獗の原因、倭寇の消滅などが日本の政治状況と密接に関連しているのが分かる。

以上の研究史の検討によって倭寇の問題は、13～14世紀の倭寇の根拠地における倭寇発生の原因→猖獗期の原因→減少の原因というサイクルの中で把握することが重要であるという事実を確認することができた。今後も、倭寇の問題を日本の政治状況に即して日本史の内部において解決しようとする努力が続けられることを期待したい。